

## 加来 英典 氏の学位論文審査の要旨

### 論文題目

日本における大腸進行性腫瘍の中の平坦・陥凹型腫瘍と側方発育型腫瘍の割合  
(Proportion of flat- and depressed-type and laterally spreading tumor among advanced colorectal neoplasia in Japan - importance as precursors of colorectal cancer)

大腸の平坦・陥凹型腫瘍や側方発育型腫瘍 (laterally spreading tumor: LST) は、本邦では以前から注目されていたが、欧米で認知されるようになったのは比較的最近である。平坦・陥凹型腫瘍や LST の一部は、欧米における大腸癌スクリーニングの標的である大腸進行性腫瘍に含まれるため、本研究では大腸進行性腫瘍におけるそれぞれの頻度と特徴を検討し、その重要性を評価した。

2002 年～2009 年に熊本市内の内視鏡検査専門医療機関において、全大腸内視鏡検査を受けた 40～79 歳の無症状初回受験者を対象とした。大腸進行性腫瘍の定義は、10mm 以上の腺腫、絨毛成分が多い腺腫 (villous adenoma)、高度異型腺腫 (high-grade dysplasia) および浸潤癌 (invasive cancer) とし、腫瘍の肉眼的形態に関しては、元々の形態が推測できない進行癌を除いた腫瘍群について検討を加え、日本内視鏡学会分類に準拠して分類した。

最終対象者は 4,910 人 (男性 2,116 人、女性 2,794 人) であった。大腸進行性腫瘍は男性の 7.9% (168/2,116)、女性の 4.7% (131/2,794)、対象者全体の 6.1% (299/4,910) に認められた。浸潤癌は全対象者の 0.5% に発見された。形態学的に polypoid 型は大腸進行性腫瘍の中の 75.3% を占めた。一方、平坦・陥凹型腫瘍は 7.5%、LST は 17.2% を占めた。平坦型腫瘍のほとんどは低～中等度異型腺腫であった。逆に陥凹型腫瘍の 40% は T1 癌であり、非常に悪性度の高い腫瘍であった。また LST の約 80% は右側結腸に存在し、LST の 30% 以上は高度異型腺腫あるいは T1 癌であった。これらの結果から、polypoid 型の大腸進行性腫瘍は大腸癌予防のための第一の標的であるが、平坦・陥凹型腫瘍や LST も一定の割合を占め、とりわけ陥凹型は悪性度が高いことが指摘された。結論として、平坦・陥凹型腫瘍や LST は大腸癌前駆病変として重要な腫瘍であり、それらの存在を考慮した大腸癌予防戦略を確立する必要があることが示された。

審査では、大腸進行性腫瘍の概念や鋸歯状腺腫の位置付け、診療に携わった内視鏡医間での病変の発見率の差異、検討症例の病理組織学的評価方法、LST の亜分類間での頻度や悪性度の違い、大腸癌の多段階発癌との関連、CT-colonography における LST の検出頻度、LST の発生部位と生活習慣病との関連、LST が側方発育を示す細胞生物学的背景、大腸癌スクリーニングに関する日本と欧米の考え方の違いなどについて質疑応答がなされたが、申請者からは的確な回答がなされた。

本研究は大腸進行性腫瘍における平坦・陥凹型腫瘍や LST の重要性を明らかにし、このような病変を考慮した大腸癌スクリーニングの必要性を指摘した点で学位に値する優れた研究と評価した。

審査委員長 細胞病理学担当教授

竹 登 元 裕

## 審査結果

学位申請者名：加来 英典

分野名またはコース名：消化器内科学

学位論文題名

日本における大腸進行性腫瘍の中の平坦・陥凹型腫瘍と側方発育型腫瘍の割合  
(Proportion of flat- and depressed-type and laterally spreading tumor among advanced colorectal neoplasia in Japan - importance as precursors of colorectal cancer)

指導：佐々木 裕 教授

判定結果：

可

不可

不可の場合：本学位論文名での再審査

可

不可

平成23年12月26日

審査委員長 細胞病理学担当教授

竹居元裕

審査委員 消化器外科学担当教授

馬場秀夫

審査委員 放射線診断学担当教授

山本厚行

審査委員 微生物学担当教授

赤地孝幸